

義仲勲功圖會

四

~ 13

3380

4



門 13
3380
4

義仲勲功圖會前編卷之四

目錄

教盛見姪夢 并 重盛逝去

重盛父の入道が奢秘を練る圖

安德帝御即位

高倉宮御緹叛 并 廻宜之事

仲綱宗盛が不札を憤る圖

藏人行家傳令旨義仲

木曾間者経進宇治合戦

大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

義仲勲功圖會前編卷之四目錄

高倉宮之若宮赴六波羅 日圖

高倉宮之西宮北國下向

續岐前司若宮將之山門登圖

大夫房覺明薦木曾

覺明討判官無任圖

緒國源氏蜂起

權頭兼遠上京

永作重巧匠會卷之四

木曾義仲勲功圖會卷之四

教威見奇夢 重威逝去條

浪速 山珪士信考訂

帝城小大政入道清威者授驕慢日々小増長一々主上々皇を蔑如し萬機の
 政を躬擅せず其跡さふ右の清威をい何と天魔鬼の入道が身小令ら
 々々中し心ある徒ハ首然疾し頭を感て離合々々小カ合しる事
 右々入道の舎弟門股中納言教威一夜の夢小んれ多ハ保元平治兩度の合
 戦小討まり六條判官為義子息義朝太夫進朝長悪源太義平陸奥六郎
 義隆平馬助忠政又子をら數百の者も各顔色夜々の或ハ天物の如
 しく續岐院を張典小素もり木幡山崎小早居都供奉進せし高
 儀を教威夢心小奇異のみのを新院の御姿を畏るく足もろ御髪
 ハ空さる小まき龍眼の光星のく大鳥のく嘴長く尖り手足の御爪長
 々と伸るる金龍の御衣を穿ち金冠を頂れむる身取恐るる討

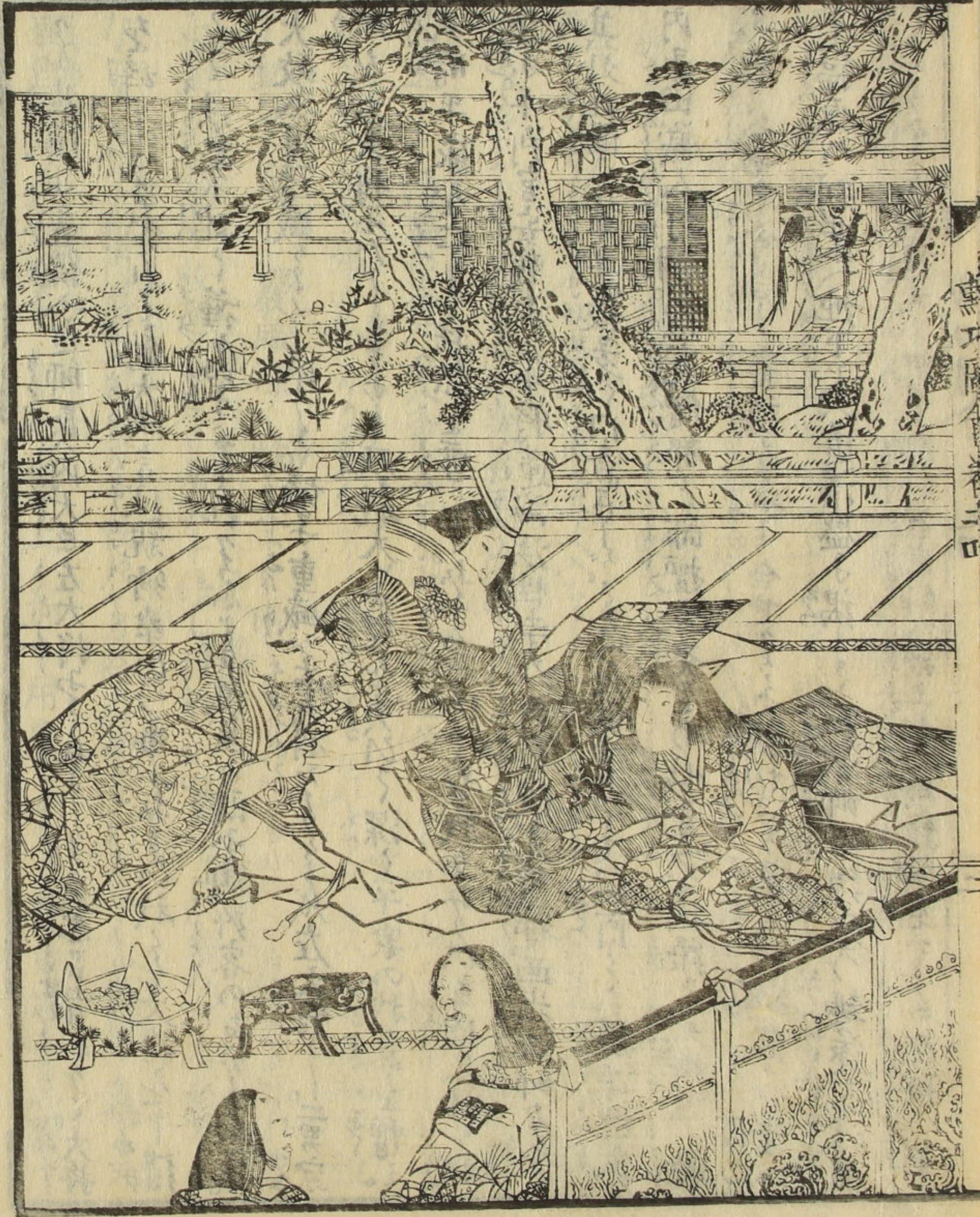
小忠政為義日音小中君を西國より遣はし是を供奉しむりぬ此十
何まろ所へ供奉しむるべやといふ左馬頭義朝亦不應ト只法皇の御所
法住寺殿へ入らむるを義平進出此義はふひひ中其故ハ院の御所小
頃日天台座主御修法中少く不動大威徳より四天王門々を守護しむ
源く入らむるを不如大政入道亭へ入らむる小中と諸將是小日トも
入進しせよと朝長前真義平後真を仕上り上まを諸將勇ま三前後を
困遣し清威の宿所西八条へ入らむるぞ教盛仰天と叫び倒れしむり
日月覚く是一場の夢なりを女ハ胸を安んずるも全身の汗ハ衣服を浸
し動氣が止教威深く怪し人小と語ると心中小危ぶと思はるる
小果しく入道が放逸邪見日來小十倍し投擲をの仁急の汝汰を女ハ
なりを小松内府重威大の敷た古今例を引出む忠練し名も元
來忠靈の心小入替り入道なれを聊も用ゆるを却重威を忌諱

其頃沙音院入道師長内大臣左大将ありて思日音ありて大将
を辞ししれを新大納言成親卿率ひの事小ありて天將を清
乙と法皇不就種々望みやされたり法皇も既小御許容の色かりたり
大政入道清威がうへへも嫡子重威が右大将なりて左大将も二男宗
成を右大将小なりと成親大の望を失ひて深く平家の執意を憎む
天晴平家を亡くし此怨を雪ぐとあからけなれ義をかりひ内々一味を相
張小平判官安頼江中将蓮海法性寺乃執行俊寛僧都西光法師かへ
其外北面の輩是彼多は意せしむるつて武士方て如何と撰津源氏の
内是田藏人行綱俊寛僧都と師檀の交をあれは是を相落く大將軍と頼
も唐谷むる會合し蜜謀をホし合せり小頼切も藏人行綱忽ち変心
し福原の別業へ馳下り入道清盛小湯り成親卿乃謀叛の趣遂に注進
しなり入道大不怒即時小京師へ馳上り成親卿をすめ謀叛の輩



小松内府
又入道が
放逸
奢接を
練子図

功の園人書卷抄



薫子園人書卷抄

を悉く捕へ已小斬罪とて罵りたるを内府重盛種々諫める小より成親々
然備前小嶋流罪し子息丹波女将平判官康頼俊寛僧都三人産
国免界嶋流し其外或は死罪或は流罪小所々々清盛勃怒尚も守
法皇然も押筆きくせし是又小松殿種々諫言有るを漸小其義
正小たり然る平家跡亡ぶる前表小や棟梁の賢臣と仰れ小松内大
臣重盛治承三年六月の頃より所勞小づつて遂小月八月朔日邁齡四十三才
あく逝去せられ清盛の慕思も此人の仁徳小覆ひし諸人平家を北有れ
離るる小今忽ち小幽冥の客となれしを法皇主上も是は小成行
世の中小やと惆惑せりや平家の人々も盲人の杖を失ひ暗夜小燈
を消るる心地伏流し泣き大方をすされも入道小の悲愁乃色を
かく却るる上上の痛れれる心地重盛死せる上も萬事心乃休小拳動
とまりひるる偏小天乃所為しを思われる

安徳帝御即位條

小松殿逝去る後洛中上下何となく騒々人心穩かざるや九月七日
大風俄小吹起り一天須臾小搔曇里只暗夜のぐぐりるを貴賤老若大
小はるる強ぐ処小洛東の將軍塚駈く鳴動とるる一時の中小三度也
就中第三度月の鳴動日本国中へえたる昔より此塚動鳴とるる何ハ必
兵車起るるははるる何なる大乱の起る兆小や人々畏惑ふ処は十一
月七日戌刻小洛中又大地震とるる二回あり是が為小堂社も柱も折
傾た端々の商家民屋傾覆とるるの數も多し今や大地裂く世界金輪際へ
沈没とるる老若男女號泣とるる色四靑小響るる駈くかどの許小禁
廷小も歩續とる天妻小はるる思召理五日八日陰陽寮安部泰親を召考
しちぬ泰親ト龜を燒室竹を振考へ大小はるる石文の表大凶兆小近
く小卿相の御身乃上小大事起り法皇由御慎懼とるる奏とる小と君も臣

も殊更ふそられ畏き。諸山の碩徳小勅く災害消滅の御祈禱を修せり。ゆゑに御座れども其強き。大政入道清盛福原より弛上りて。卿相四十二人の官職を止む。押籠刺。関白太政大臣基房公の官位を削りて。太宰権師。秘一筑紫。流しなむ。是をさく希代。暴悪と。上下憫惑ひのゆゑ。皇所入道。法皇を鳥羽殿。押籠進。せ。嚴く番卒を付く。出入を禁。改まされ。院。只配所。罪囚。御傍。仕。も。者。右衛門佐と。中々。女房。元。朝。の供御。勲。の。明。暮。御。衣。の。袖。と。御。涙。ふ。あ。わ。せ。む。是。も。み。續。岐。院。清。盛。心。小。入。替。り。討。つ。せ。あ。つ。と。あ。れ。々。斯。く。其。年。も。暮。羽。治。承。治。承。治。四年。二月。入。道。清。盛。が。う。う。ひ。く。當。今。高。倉。君。院。何。乃。御。過。ゆ。は。さ。る。ふ。推。御。位。を。下。り。なり。我。女。の。建。礼。門。院。乃。腹。小。降。誕。ゆ。り。く。多。白。皇子。僅。小。三。才。中。く。す。帝。位。小。即。なり。是。以。安。徳。天皇。と。中。け。り。緘。小。大。政。入。道。が。暴。逆。漢。王。莽。唐。の。録。山。も。遙。小。よ。さ。り。天。憎。地。怒。

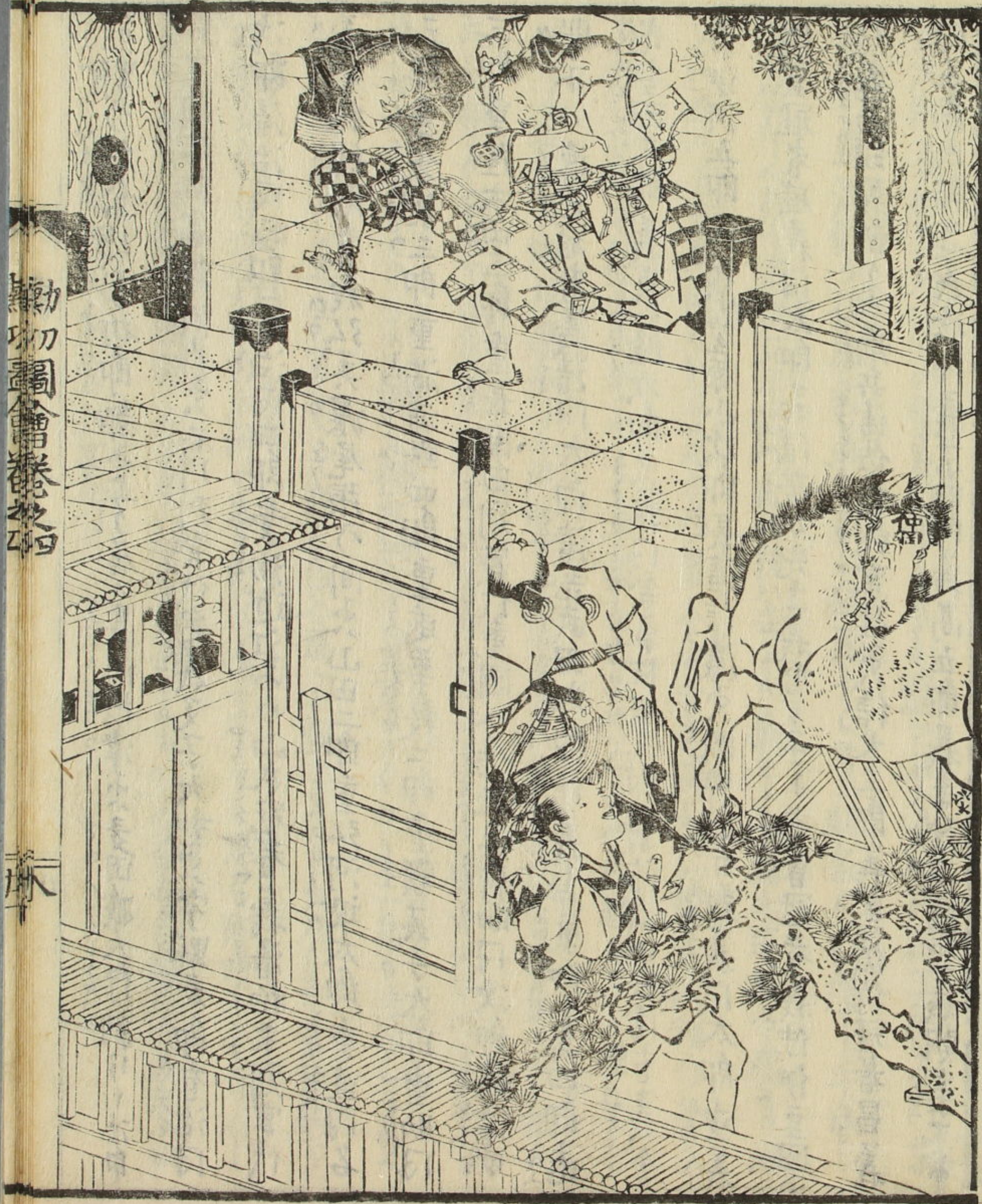
夫。孺。子。者。と。必。と。涙。以。盛。か。ふ。者。必。と。養。ふ。か。清。盛。豈。と。安。徳。小。在。と。得。ん。と。人。々。潜。耳。結。め。世。乃。動。静。必。と。規。ひ。ま。

高倉宮御謀叛再廻宣之條

其。頃。一。院。弟。二。乃。皇。子。以。仁。王。と。中。なる。御。母。春。宮。太。夫。公。実。卿。の。息。男。加。賀。大。納。言。季。成。卿。乃。御。女。か。り。二。條。高。倉。宮。小。御。座。な。れ。む。世。乃。人。高。倉。宮。と。や。る。去。ふ。承。治。元。年。十。二。月。十。六。日。小。御。年。十。五。あ。く。大。宮。乃。御。所。小。忍。て。御。元。服。有。今。治。承。治。四年。小。既。小。三。十。歳。小。せ。む。親。王。の。宣。旨。然。小。も。業。と。む。子。世。小。沈。と。と。御。座。な。ま。此。宮。御。手。跡。も。ぐ。と。御。才。智。も。勝。五。八。天。晴。御。位。小。即。せ。む。未。代。乃。賢。王。と。中。なる。令。や。れ。も。大。政。入。道。朝。推。を。掌。握。し。公。勢。を。擅。小。巴。之。門。と。く。罪。ある。も。罪。許。功。な。れ。も。賞。し。官。位。所。領。心。欲。む。る。俣。子。子。行。へ。も。此。宮。の。御。事。な。ど。小。目。小。も。け。と。あ。捨。と。れ。宮。小。只。抄。筆。御。座。春。八。花。乃。下。小。傾。く。日。影。を。敷。た。秋。八。月。乃。前。小。明。行。空。を。忍。と。雨。小。紋。と。沾。

一雪小おのひを包む世を憂ふの小おが弱しむひたる入道が惡逆次第
小起過しつ。二院を押籠まり今上の御位を下し。関白左近の卿相の官を
削りかどとまろを見せしむ。御憤洩す。斯程の逆臣を天下の武士殊
戮せしむ。後小他小見る。日月の地小墮王法衰滅の時。或は怒り或
ハ惡む。玉の朝之二度乃供御さる。只管御物小ひひど。世に世に
然る小源三位入道頼政の文武二道小疎す。殊小歌道の達者や。風流の
武士がれば。此言へも親しまり。二を和歌の御友がたけり。頃し。月九日
例のしつ。何侯し。多小。官小。思召し。お。ハ。し。多。由。殊小。御相。し。親
土。御者。綱。下。させ。の。頼政。と。只。二人。御歌。物語。を。始。し。古今。の。世。の。ま
傳。變。り。か。る。ひ。を。結。合。む。の。夜。中。も。成。れ。を。局。女。房。達。を。遠。ざ。け。し。ひ。を。仰
々。の。御。身。に。な。る。親。し。和。歌。の。友。中。の。心。隈。を。小。丸。心。小。お。し。し。代。法。下
さ。え。か。ハ。勢。々。小。お。し。し。と。と。小。お。の。有。る。小。洞。し。し。仰。出。れ。る。御

太政公直保元平治の軍功より。官位昇進。大國數多下し。むろり。し。
何し。心。橋。已。が。親。屬。し。し。何。の。功。も。あ。ら。ず。小。官。階。を。上。進。め。他人。を。させ。
罪。を。た。も。し。い。ら。る。官。位。削。り。職。を。止。め。親。へ。御。過。も。や。ま。さ。お。今。上。の。御。位
を。さ。め。り。し。り。已。が。孫。の。皇。子。を。帝。位。小。進。め。外。叔。の。威。を。逞。く。し。故。あ。れ
小。法。皇。を。押。籠。も。り。一。乃。人。を。擅。小。解。官。配。流。し。る。か。ん。と。古。も。今。も。斯。程。の
逆。臣。ハ。あ。ら。る。傳。た。り。王。恭。董。卓。し。り。し。も。是。程。小。有。り。や。丸。不。肖。を。し。垂
天。照。御。神。より。四。十。八。代。の。神。孫。し。し。於。の。三。十。元。と。し。も。今。小。親。王。の。宣。旨
し。も。免。れ。ん。と。是。皆。太。政。入。道。船。政。勢。を。專。小。と。れ。を。かり。れ。ん。も。丸。が。身。に。德
か。れ。は。是。成。忍。し。思。子。を。かり。又。法。皇。賊。臣。の。為。小。困。り。れ。れ。ん。子。及。安。閑。し。て
余。所。小。ん。ふ。忍。辱。り。や。亮。ハ。表。老。の。母。を。尊。び。舜。ハ。頑。た。り。又。を。敬。り。し。や
憐。御。身。丸。を。扶。く。義。兵。を。起。し。平。家。の。一。門。を。亡。し。し。院。の。御。憤。を。晴。し。見。る。御
敷。を。耐。心。め。し。し。ハ。譬。言。ハ。此。身。車。の。場。小。駭。を。晒。し。も。恨。み。え。ん。と。世。小。ら。る。と。因。ひ



ひのりかづる せうり
宗盛仲綱の乗馬
木下蔭乃顔
焼印く追返
兵革の節を
生むる因



熊野の任人ふゆ折郎都より居り其他摂津小多田藏人行綱曰く次郎
知実曰三郎高頼河内小石川判官代定義父子大和守野太即有治曰
次郎清治曰三郎義治曰四郎業治近江小八山本冠者義清拍木判官代
義安錦織冠者義弘美濃尾張の同小八山田二郎重弘河内太即重直曰名
三郎重房泉三郎重満浦野四郎重遠華敷二郎重頼其子太即重助曰
三郎重隆木田二郎重長關田判官代重國八嶋先生齊助曰次郎晴清甲
斐小八逸見冠者義清曰太即清光武田太即信義舍弟加美四郎遠
光安田三郎義貞一條次郎忠頼曰舍弟板垣三郎兼信武田兵衛右義舍
弟伊沢五郎信光小笠原小次郎長清信濃小岡田冠者親義曰太即重義
平賀冠者盛義曰太即義信帶刀先生義賢の子小木曾冠者義仲伊豆國小
八左馬頭義朝の子前兵衛佐頼朝常陸小信太三郎義憲佐竹冠者昌義
曰子息太即忠義次郎義宗四郎義高五郎義季陸奥國小義朝未

源九郎義経其外流々の黨を拔擧せしむるは是皆六孫王経基の末
裔新幾満仲の後裔頼義の家が嫡孫中昔朝家を保護し平氏と
肩をかゝりひひ保元平治の乱の後在りも無くも扁土遠境の塵り埋
もれ時乃至我待居り君是亦の輩小令旨を賜らむ執竜龍躍りかひ
成なり不日小池上平家を亡し何の難れりういふこと
述るる中官御機嫌兩しく御心中思召多る昔日女納言惟長と申人
丸を相し君八十善萬葉の位を踐む人相かへしすゆす天下の事か
拾ふべしと申す彼人相女納言と異名し中より一也也違ふこと
彼をりつ是をかりむ今源三位入道頼母に中丸が帝業を嗣ぎ
時熟し伊勢内外の太神の志計を谷あふしと申召即時小令旨遊
々中兵衛佐頼朝と木曾冠者義仲とを別り令旨を賜る其女小曰
下北國源氏並官兵衛所

應早任回宣狀且木曾冠者源義仲為大將軍令泰洛事

右 宣旨意趣者我為百王孫由期室祚猶依聖運遲々未至即位而清盛入道以一旦真怪令治天下誇非分推威欲絕皇法之所依有仁神之守護不道暴敵之奸望未及王法失亡之條明矣謹仰嚴旨可責清盛也速致同心勵微力果其意趣必進帝位者朝思爭可空哉然者依清盛武勢下知既致都洛空伎我皇思以東北武勢何不治天下哉旁各可仰景迹也若於背宣命者早可致伐責狀如件以宣

治承四年四月九日

前右少史小槻宿禰

伊豆の頼朝へ下されり。同日文なり。扱此御使をを維小付付。仰ある。三位入道首を傾け。稍かひ廻りて。大事の御使等。閑の人中へハ叶々。幸ひも。新宮十郎義盛在京。いへ。彼を暗小る。

て。使節の義を仰會られ。並ぶぐいんと。中より。宮実もと。潜小義盛。以。召。れ。

藏人行家傳令旨義仲條

茲小十郎義盛の所用あり。都小より。平家の議論を。噂。り。潜居。る。小。夜陰。よ。及び。俄。小。高倉。宮。より。仰。合。さ。る。旨。あれ。侍。候。と。な。り。御。使。を。う。つ。す。中。を。せ。し。小。より。何。更。中。即。刺。衣。服。を。改。め。御。使。者。と。同。伴。し。宮。へ。上。り。御。前。の。鉢。を。窺。ふ。源。三。位。頼。政。入。侍。候。其。外。の。人。中。か。れ。鉢。を。か。れ。心。許。り。な。り。遙。乃。此。方。小。平。伏。し。義。盛。召。小。應。へ。奉。候。し。と。敬。命。を。宮。殊。小。御。様。嫌。兩。御。座。近。く。召。ま。り。夜。中。俄。小。招。れ。寄。り。る。一。大。事。次。頼。入。り。か。ゆ。か。り。如。何。承。引。い。や。し。宣。へ。義。盛。畏。言。甲。必。及。か。れ。某。を。武。士。か。ま。り。思。召。御。頼。と。い。ふ。於。こ。如。何。あ。る。御。大。更。中。の。違。變。仕。り。ま。く。い。と。る。即。時。小。神。文。を。認。り。血。判。し。呈。し。られ。宮。限。を。御。愧。喜。ま。り。と。そ。れ。頼。政。委。し。中。を。せ。し。と。仰。せ。ら。れ。三。位。入。道。を。顯。尊。の。言。乃。思。召。乃。水。未。残。ら。と。演。言。と。十。郎。更。々。大。小。悦。ひ。三。度。拜。し。と。す。

微臣苟も庭尉為義子とて遠た熊野小潜居いす朽惜の天晴時節
 もが一度索懐の旗を用た君の為家乃為暴悪の平家を亡し。多年乃勢
 憤を暗しんし三所推現小祈誓をうけ祈ぬ日ともいふるも一果し推
 現臣が微志を納受りし。る嚴命を蒙りし。る難有さ。其御
 使を奉り。東國北國の源氏より令旨を廻りし。難違背仕る
 づた不日小言報恩の家人を召集。我れと弛登り。謀略を定り平家の二
 門を壑せんとす。朽木を碎くよりも安くいんと。妻をなけ中。二位入
 道是を制し。る一大事の御使狂忽ふせを。心ち世小われ。官の御身小
 禍ひを蒙りせむ。平家無道なりと。世を取。余年。昔源氏
 の家人より。今平家の録を食。自其思義。源氏の旧思と。心
 者も多る。然れど能。其心腹を探らんと。大支を結。る。心
 心。心を織。妻を隠。戒。十郎。法師

が賢まふかり。面小慎の色を。ねへ道宮小向。大義の回
 宣の御使無官。其恐。二。小と緒國の源氏ホか思。如何
 小。耳。義盛。官位を下。玉。執。宮。小。當坐
 小。小。義盛を改。行家。十郎。大。悦。思。謝。猶
 是。上。令。旨。頂戴。御。私。先。消息。認
 古。遣。其。文。意。平。家。暴。惡。増。長。法。皇。を。鳥。羽。殿。押。籠。め
 姓。乃。源。氏。年。來。の。家。人。を。催。促。乃。為。小。關。東。及。北。國。下。る。其。表。小。家。人。ホ
 小。相。觸。肉。之。軍。戰。乃。用。意。を。行。家。が。上。洛。を。相。待。備。し。と。認。め。其。身
 之。兜。巾。蓑。掛。拂。乃。衣。乃。身。小。穿。ち。金。剛。杖。つ。た。は。人。月。小。熊。野。山。伏。の。羽
 黒。結。む。体。小。紛。装。治。承。四。年。四。月。十。日。乃。朝。小。東。國。筋。を。志。し。啓。行
 一。先。近。江。中。山。本。拍。木。錦。織。小。觸。し。夫。より。美。濃。尾。張。越。山。田。川。辺

泉浦野葦敷開田八島乃後小觸廻り。又其より信濃路ふるく岡田平賀小令
 旨を示し續く木曾冠者義仲許ふり。姓名を通ど案内を乞ふ。バ
 義仲頓ち行家を客舎へ請へ對面ある。行家を義仲のより八頼政小安じむ。
 山深丸扁鄙ふ人と成れど。定むくつけある田舎武士小をとしおりの慢り。身
 丈高の白面俊目言語動止堂々初驚歎。色を正しや々々。某此
 度う姿小紛装諸國を回る高倉宮乃御頼小より。平家追討の令旨を觸
 示んが為なり。別ち和殿八源三位頼政執達せしむ。別幣乃令旨を賜
 へる処なれど。敬ぐ頂戴し。いと小ど。義仲大に悦び即時沐浴齊戒し。々
 衣紋を改め。敬々令旨を頂戴ある。其式作法古美を守り。身乃動止優
 美なれど。行家倍感歎し。和殿八我舎兄義賢乃二男あり。某と親し。叔
 姪乃間なかり。も小平家小世を授け。熊野と木曾と山川數百里を隔て
 塾居なれ。是を對面せしむを得む。如何なる鄙人小成りんと。尚所へ

きく。追も覺束か。おのひ。小人品骨柄し。行儀作法。都耻し。追
 小成長。嬉し。天暗緒國乃源氏小先立一番小都。攻上り強暴乃平家
 を追討し。奇せ乃功を立られ。冠き。云々。義仲完示し。妙実身
 不肖なれ。因節を窺ひ。義兵を起し。君王乃震襟を安ん。家名を再
 興せしむ。いと。時々小一味乃武士を相結。合戦乃用意あり。具あり。い
 とも。悪人あ。天子を孫小。程乃清盛入道を私乃意統。之。伐
 く。天暗親王家。宮方乃令旨を得。北陸道小旗を上。と。おのひ。小省
 望。既小達し。今北嚴命を得。上。不日小思。但。伊豆乃頼朝と。の
 く。示し。合せ。義。彼所乃使。東國北國同時小旗を。在。之。
 然。平家。敵。途。失。其。攻。一。一。
 く。天下を定。何乃難。手小取。行。家。勇
 立。行。未。謀。示。合。木。曾。一。日。滯。留。是。より。東。國。筋。乃。源。氏。中。比。姪

り小島乃頼朝小令旨を傳へて義仲小別を告再度旅行おを赴る

木曾間者注進守治合戦條

去程不冠者義仲不意高倉宮より別紙の令旨を賜ふ今ハ何を
期とて速小勢揃し先近隣の軍を攻廢勢小素く都へ攻上りんと勇
立諸士を集へて評議ある小権頭兼遠席を進出大の制し曰君令旨
を得ぬとていふも亦味方の人心定まらざる隣國の源氏の動靜も相
先々吏を隠密ふし世のかり行まぬ見定め其上ゆく吏を幾しと今
諸國小源氏乃氏族是彼有とて皆小身微力も志りも都へ攻上り程の
度量ある人なり只伊豆乃流人前兵衛佐殿ハ蓋世の英才ゆ大將軍の機
を備へし生得狐疑深た人なり今令旨を得て義兵を起とも國八
列の人心を見定めぬ内とも都へ攻上りしを將頭殿ハ八男九郎御曹
子孔明張良が智を貯樊會周勃が勇を兼し俊傑なれども隨逐の即

も身も遠く興列小潛し御館秀衡小身を寄り火急小上浴ありや

もいかにれを都城先登せん者君乃外小をいれども怪急小吏を遂ん

と玉の旁に切なれのみ御身小災害及びいれども小本曾の

突もと出陣を止し物押し者を向者とも都へ上り平家乃動靜を

窺ハ内々兵粮武器を貯し諸卒を調煉し専ら軍戦の用意あり

小其年六月三日小京都へ上りたれども間者兩三人絶飯り義仲小湯

ハ某ホ都小上り高客となり茲彼処小徘徊し平家の動靜を窺ひ五月

十四日乃夜俄小六波羅乃下知し檢非違使源太夫判官兼綱出羽判官太

史光長小軍勢を授け高倉宮へ押寄し其昧只吏なると相刀をえいむも

何故と探り少小宮兼諸國乃源氏令旨を下され吏露頭ふやん

清盛入道の怒強く宮を捨し土佐の佃流しなると結構なりや者

乃い申扱ハ一大吏なり某ホ諸卒小給し御所へ入込隙あり枚ひなり尚

御供仕と伺ひ小宮方小早く此吏を更むと相刃之宮をく御所
の男女二人もなげ抜落し長谷部長兵衛尉信連一人踏留り多勢を引受憤激
突戦秘術を奮ひ敵十七八騎斬り落し手負の者八敷あるを其後信連
も太刀折大手を廣げ人礫を歩溢廻りいひ過る金式と申者の長刀小
く足を損じ遠小生捕まひ某亦も入る異りさる間小御所を紛れ出猶街の
風流を歩い小元来宮御謀叛の一件平家(泄)令旨乃御使藏人行家どの
より更起まりと云觸し其故を委し探り歩い小行家殿令旨乃御使と
く都幾足乃砌内々古御熊野新宮(消息)を遺しやれども清盛惡逆増
長し法皇を押籠主上乃御位を下しよりぬ是小依り弟二乃皇子高倉の
宮平家を追討乃為諸國乃源氏令旨を賜る其御使を行家奉らるる今
北國東國(下向)と云れ不日小諸國乃源軍都へ攻上るを乞ふ其地小おひも
内々家録即黨小此旨を示し合戦乃用意成りて行家が飯を相待いと下

されし之の更さる小依り耶智新宮乃者ども寄合し軍議しるを平家乃祈
乃師大江法眼少付即時小大衆三千人を驅集新宮乃渚(兵船)を進し
新宮方小も二千余騎少く向ひ合せ合戦一日夜小及び遠小大江方敗績し引
退きぬ然れ小大江法眼が甥小和泉國乃住人佐野法橋と云者福原乃清盛
が許(羽)撥を托し遂小注進しより入道大少小なる急小都(上)り宮を
虜小せんとせしより小頼政が宮の御味方なりし平家いさむむと
相刃え三位入道殿の二男判官兼綱を征兵乃大将とて差向しより兼綱との
より又三位入道殿(注進)あると早くも官方落延しと歩いと語りたれど我
仲り兼遠以下以下外小なる本曾の席をくすすやあひ呼く不覚
か伯叔行家の行迹をくも大切なる御使小擇せられたる根小古卿(機)密
を泄し宮乃御身小禍をむかひも薄情さよ扱其後宮小如何たりむい
と伺ふ同者答へやう其後宮乃安否を探り歩い小宮(征)手乃向すと

宵食し物もとりあへど其夜三井寺まゝ落させし法師を頼り御坐
あふ処翌日三位入道より又子も御跡をまゝし馳せし南都東大寺
寺の衆徒おび山門の大家を相語り各領掌し蝶状を取合し宮の御
方をなると処平家方より間諜を贈り山門の衆徒を省し山法師ホ
賄賂小眼を忽ち官方一味の約を棄て平家心を寄るふより平家六時を
回し三井寺を攻伐し軍勢を催促し官方頼切し山門違背の上諸
國の源氏も三騎も馳参り三井寺より敵を引清んすも叶はずし宮を
守護し大関通り小関寺関山寺越は逢坂井坂神無社を經醍醐より木
幡の里をうつし宇治へ出む其間僅三里程も宮六度より御落馬し
しりくれば女時平等院へ入り御抱し早くも平家乃征將左兵衛督
知盛藏人重衡中宮亮通盛薩大守忠度左衛門行盛など二萬余騎も
押寄川乃東陣をとり官方と此跡をえん宇治橋の中り間三間をり引放

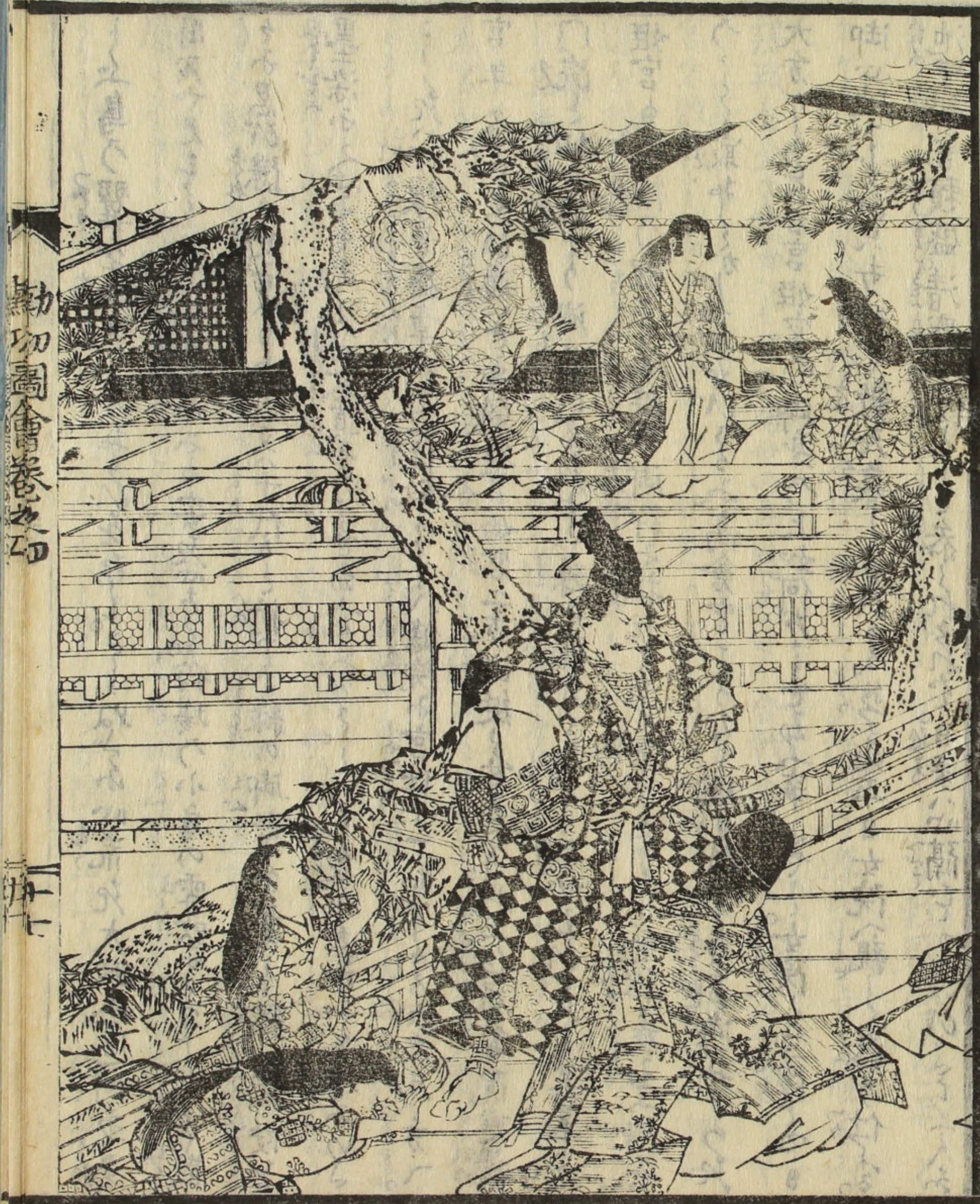
備へ走り未明より矢軍をいひ中も寺法師の内筒井淨妙明春も僧
尺もたぬ橋桁を走り廻り敵を射し十七騎手負を數ふ其後矢種も
尽し長石追り走り廻り敵を切り又四人其太刀早業小碓易し近
付者もたぬ明春志も停まり息を吐し又一法師と名称し
池出りも小狭れ橋桁も大の法師のまゝを免列し因り列起敵を斬し
草を薙ぎし時々回し十七騎切し落し猶も手痛く働れし平家と大
勢しりし二人の法師も走りし川に追込れ溺死し者數ありし官方も
明春一末を討せし山満院慶秀矢切り但馬をり名も悪僧へく敵
橋の上敵強をいふ早くも早くも早くも早くも早くも早くも早くも
又太郎忠綱と名称其勢凡三百余騎橋より三段をり上り川へ入り渡り
いより平軍は小属され千騎二千騎歩連し遂小悉く川をり勢

小走りく突進し。其のひふ取高名を顕し。官方も不勢し。ひ集り勢ふ
 れむ。遂に敗績し。名あり武士多く討死す。源三位入道殿御又子も平等院に
 自殺あり。宮に奈良を志し。落む。処光明山にせむ。頃流矢きりて
 御脇坪に深く。其後御落馬し。多を能弾判官景高落合。御首を
 しり。一五二季。結り。義仲大に悲歎あり。叔父行家が一時の不覚よ
 宮御落命せむ。つひ。名家の頼政又子宿志をも達せむ。羊途
 小く命を損せし。と安く。我別腹の兄六條藏人仲家子息藏人太郎由一
 定戦死せし。多。嗚呼天如何。わん。暴悪の平家を扶け。絨忠の頼政。禍
 一。おど。天怒り地悲。物狂。ん。おひ。多。兼遠大。割。君さの
 歎。せ。ふ。孔明が言。小も人吏を謀。天吏を成。せり。時の熟。せ。ハ
 聖人賢者も奈何も。此上。高倉宮の御子一方を當國。下。時を
 待。平家を亡。御子を帝位。即。宮の御為。七堂伽羅を建。

小勝る御追善。下。木曾。の。実。と。歎。を。心。利。者
 者三十余人を擇出。各姿を格装せ。宮小縁あり。加賀大納言。許。上。せ。ら。る。
 是宮乃御子を木曾。迎。へ。ま。う。ん。の。結。構。り。と。

高倉宮若宮赴六波羅條

扱も都小清盛入道高倉宮を討。源三位一家を亡。聊心を安ん。此
 度の結構を決。法皇の睿慮より出。あ。り。推。量。去。る。十。月。小。鳥。羽。の
 離宮に押籠。宗盛。多。歎。れ。や。お。よ。ん。漸。々。五。月。十。四。日。小。鳥。羽。殿
 を出。も。八。條。鳥。丸。の。御。所。へ。入。り。せ。し。小。又。々。五。月。廿。日。小。再。び。鳥。羽。殿。押。こ。め。
 たり。ぬ。れ。も。勃。怒。猶。止。ま。有。り。高。倉。宮。の。御。子。達。を。残。ら。せ。し。出。し。失。
 ひ。な。れ。く。下。知。り。多。く。浅。猿。う。り。高。倉。宮。小。腹。々。小。御。子。數。多。り。と。る。
 今。般。御。謀。叛。を。思。召。し。せ。む。其。の。な。ず。く。流。矢。乃。為。小。七。と。せ。む。ひ。と。れ。ん。
 其。方。々。の。人。々。御。子。達。乃。御。歎。れ。と。譬。言。小。物。が。く。び。と。小。沖。行。船。の。楫。を。と。え。天。



勤切圖會卷之四

十一



高倉宮の
召捕
六波羅へ
召捕
召捕

勤切圖會卷之四

十二

と鳥の羽を抜きしるかりひをわし。さうねふ心荒れ大政入道何あも
月夜やんそくし御敷の中ふ安ん心なり。狩場乃小鳥の雪吹ふさく散
々お思ひ隠させまふあり。又千代か行ず緑の御髪をせり。錦繡乃伎と
墨塗お心ふもわぬ元道下かせまふあり。さうねふ心荒れ大政入道何あも
さうねふ心荒れ大政入道何あも。八條院お宮仕してあり。さうねふ心荒れ大政入道何あも
官年久し思ひ通させまふ。若宮姫宮二方出延させまふ。此三位局女院建禮
門院と幼れ頃より御遊びがたあ。殊お隔なくかか。さうねふ心荒れ大政入道何あも
姫宮も襷袴乃裡より女院の御許お招たり。生さすのせ。躬産お脚子
ろくろ取おか。つれおひさふ。高倉宮さうねふ心荒れ大政入道何あも
大方々々。若宮姫宮の御身乃上如何かせまふ事おや。女院も三位どの
御心地おし。只お伏す敷た暮さる。さうねふ心荒れ大政入道何あも
池中納言頼盛。清盛の使として参られ。日來お心隔む。おひさふ。さうねふ心荒れ大政入道何あも

さうねふ心荒れ大政入道何あも。頼盛威儀を正
中々ろ此度高倉官源三位入道が勸おさる。諸國の源氏お令旨を賜り御
謀叛を企させまふ。君の為世の為黙止さる。合戦おさる。味方利運つ
官方敗戦。官も御落命させまふ。それ付大相國の勃怒強。官の御子
達を將て参さる。其をさ。越ま。方々の御怒傷。さうねふ心荒れ大政入道何あも
い一度言出せ。更再び爰せぬ。入道殿の命おくれ。奈何も。さうねふ心荒れ大政入道何あも
若宮を渡。さうねふ心荒れ大政入道何あも。相述る。女院も三位どの。兼さる。さうねふ心荒れ大政入道何あも
さうねふ心荒れ大政入道何あも。今更胸は。塞り魂消る心地。さうねふ心荒れ大政入道何あも。只何と答へ。つれおひさふ
弁おむ。夜乃袖を負ふ。あて。さうねふ心荒れ大政入道何あも。許お泣伏おひぬ。頼盛も。さうねふ心荒れ大政入道何あも
さうねふ心荒れ大政入道何あも。さうねふ心荒れ大政入道何あも。猶豫さる。さうねふ心荒れ大政入道何あも。私彈判官頼盛を
屬。さうねふ心荒れ大政入道何あも。時刻遅滞。せを大相國の御気色。猶り。さうねふ心荒れ大政入道何あも。悪く若君乃御為。さうねふ心荒れ大政入道何あも
さうねふ心荒れ大政入道何あも。疾々若宮を請け。さうねふ心荒れ大政入道何あも。せり。さうねふ心荒れ大政入道何あも。女院も三位どの。さうねふ心荒れ大政入道何あも。御敷の中

も彼判官ハ宮の矢ふあさう亡ぬひも成情なく御前まで取らうも無道
者として深く怨を悪く思ふも潜小女房達小命し若宮を御寐所へ深く隠
し忍みせ進ませ。叔頼盛小向ひ仰るハ宮御謀叛あらはれぬとせえ一曉より
若君ハ何國行ぬひとぬはふんえむとぞ。かりひとも小御乳母などの心ざし
賺し出。影を隠しなふふとあさ。當館ハさふ御行儀あらうと一絨
し中宣ふを飛彈の判官嘲しひ。御釘中ハ小娘女子をも賺しませぬ
ぞ。此御所ふさし。等閑小三飯り大相國ハ何と言上仕る
た御為あしくささひひ。由かた偽り成宣ひ出。よりあくとせむ。女院
由三位よも露のくか。判官大ハ小氣を焦燥く頼盛乃袖を引。此上
殿中ハ隈々局々も搜し需ても官を尋出。し勧む。女院御氣色を
損ぬひ。をれ景家何とぞ。若君ハ一はさむとせむ。殿中を搜しても需
し。是ハ不測の中よりなり。妾苟も當今の母より。さるハ武士ハ帳内

搜し辱められ。國母の名づれも主命存命。憂世の人ハ笑ひしり
まじりハ疾かた人の數ふ入ら。其跡あ。如何も心小任し。己守カハ
手をうけむ。頼盛大ハ小周障。推止ら。先妻ふとせむ。景家ハ麻忽と
し。御又入道ハ嚴命を重んじ。起りいなり。若宮ハ一まじりハハカはし。
此上ハ三位殿と姫宮を將。六波羅ハ泰。其旨相國ハ言上。い乙と利を推
す。女院も三位どのも理り。上ハ詮方。途方ハ昏。どおり。若宮
ハ物蔭より其跡を御覽し。妻乃体道れ。と。か。今。年。僅。小。八。歳。小。り
らせむ。我ハ小母上姉宮。小夏。同。ん。せ。も。と。不。孝。なり。後。の。世。の。罪。も。と
恐し。唇。も。か。り。帳。内。より。突。然。と。歩。出。ぬ。頼。盛。乃。前。小。座。し。宣。ひ。
丸。小。御。所。を。騒。り。女。院。母。上。姫。宮。小。夏。を。見。せ。な。も。と。道。か。り。と。疾。く
丸。を。相。國。乃。許。引。行。よ。と。初。と。し。仰。々。女。院。を。始。す。せ。二。位。殿。姫。宮。女
房。達。老。も。若。れ。も。色。を。ま。く。泣。沈。ぬ。頼。盛。も。流。石。若。木。な。ら。ぬ。水。干。乃

袖を洞ふ漫一曰々々いづの宜ひきりきりおとすの御謀級又小六波羅伴ひ
 まるも争うあしく計らひもなげ心強く思召しり御まりの御用意い
 つと勧めまらふおと母局注々御化粧のせ。御髪ふあく御顔をつまくと
 あまのり。斯むらうらふく生まぬ者争う独恐ろし六波羅渡りまら
 らぬた妻も俱小将く行ぬと抱た付く注入ぬ若宮ゆいと悲し涙さしきま
 ひかかろ。つらまぐせや一歎せぬも其甲斐なきも母君お姉宮をいさ
 傳きぬくと宜あど人々弥注がれり。秘弾判官声を属し。時延ひひくハ弥
 御為あしきま。早々とせりまされむ母公力なく御衣着くま直玉着を
 りくまら繕ひ進しせぬふも只夢のやふ小せか一召心荒れた大政入道ばうまふ
 計らふと心とくくあね御洞ふれれり頼盛を頼り若宮を御車
 小抱た入兵卒小押出させれば女院も三位ゆも亡れぬ御心地。其後
 臥沈く注入ぬ。是小付ても女院の御心小宿世いあ契り在て。此宮と強

線乃内り生一之今更く憂うをみるや疾より斯と志すし幼り
 足あつらふも一れとくね更を悔歎たぬ増く母局前後をも弁
 へまらど年来手習物字びぬあも人あし小勝も幼れ御心あ御孝行く
 深く御在た。あをなう心小答辨しものを人手小れ進くま前乃世
 如何なる悪報ひの廻りきりまやせやく法皇の昔のま御坐むいうま
 めも歎中く御身小憂をを見せまら。是く大政入道が為小辨筆られぬも
 其まも叶まど世の中乃童あふ赤ど何をも弁む母の側を放ましこと
 泣むつらふたふあや姉宮小憂をんま悲しと各称出ぬ。健気
 まは物まひなれ昔ふな。先立のひ又宮小見せまら。いさま小悦ひま
 めうんしあぬま口説く。声をもやまど歎色ま。高なる賤れたも
 子をかり圖小送し親心のあゆものやゆのやゆ。心かた婢女仕下ま洞ふ
 袖をぞめり。是ハ叔母頼盛景家ハ若宮を守り六波羅へ飯り。車より

王乃御行へまゝなり。女院の方へ斯く申す。女院も二位の由女
胸を安んじし頼盛の針ひを悦びたまふ。此仁王寺の法親王後白河院
の皇子也。若宮と叔姪の御申ケル。珠小懇小芳とせむ。御膝下小
く生し。後出家得道させたり。御名を道尊と呼。天晴天下の碩徳小成
なると。末頼母し。わがもろお。其甲斐なり。十八歳なり。逝去む。法
親王深く惜む。歎をせむ。いとど。

西宮北國御下向條

茲ふす。殿富門院乃御所ふむら。治部卿の局と申女房も。高倉宮小
押さむ。若宮一所をりけり。若宮の中ふ。四男あり。せり。四宮とぞ
世の人々。是も宮御。洛命の汝汰を。手乃舞足の踏を。忘る。何國小隱
し。まると。強だ惑ひ。む。故高倉宮の御乳人小須岐前司重秀と
者あり。源三位頼政と。莫逆の友なり。頼政三井寺の御傳。馳せり。

んとせ。初り。潜小重秀を招き。ナ。此度宮の思召。ま。と。露顯せ。上
と千小。御利運有。官方敗軍と。申。時。早。若宮乃御
伊。信濃。木曾。義仲。新。御身の上を頼。いと。是。合。言。の。行。お。ま。の。昔。を。言。女。時。若。宮。の。御。身。を。隠。せ。む。と。申。
追。腰。と。殉。死。せ。む。と。申。頼。政。遺。言。ハ。茲。なり。と。思。ひ。返。し。局。と。蜜。意
を。示。し。合。せ。若。宮。を。負。進。せ。夜。小。扮。ま。御。所。を。忍。ひ。出。さ。り。何。國。を。忍
む。せ。む。と。思。惟。し。多。お。指。尚。り。是。と。申。方。も。な。れ。故。宮。の。縁。し
は。ま。加。大。納。言。の。行。お。ま。の。昔。を。言。女。時。若。宮。の。御。身。を。隠。せ。む。と。申。
小。大。納。言。も。重。秀。が。滅。忠。を。感。下。ま。せ。し。平。家。方。乃。堅。守。嚴。し。我。方。小
貯。隱。し。万。全。の。謀。を。て。叡。山。の。願。真。阿。闍。梨。と。大。納。言。の。行。乃。師。た。れ。是。か
方。小。誓。時。御。身。を。隠。し。其。後。北。國。へ。落。し。進。せ。む。不。如。と。大。納。言。の。消息

さぬきの
 續岐
 だ
 前司
 高倉の四宮
 との系を
 伴う山門へ
 赴く因



幼刀圖會集卷之四

廿三



幼刀圖會集卷之四

廿三

賜りし重秀是を頂戴し又若君を肩山門に登り阿闍梨小錫し
 大納言の消息を言し若君の御吏を頼まされむ阿闍梨一儀あり及み氣
 引あり若君を坊中小時ひきり憫み御女抱すれども重秀大に悦び其身は安
 を扮装し洛中へ出く街の風貌を安六波羅の命しり四の宮の御行儀を
 草を別々穿毬せり殿の近國遠國より配府を叩きしりなれむ重
 秀深く恐るし若君を阿闍梨の許に深く隠しり然るも木曾殿の
 間者都著し加賀大納言の許に到り義仲の密意を言上りなれむ大納言の
 渡り小松を得し心地し御悦斜なると即ち睿山顯真阿闍梨の許に四
 宮忍ひしり告暖心の御隨身を副し木曾の間者を山門に登りしり間者
 顯真阿闍梨の坊に下り義仲の密意し加賀大納言の御意を達しなれむ
 阿闍梨雀躍し悦びしり重秀示し合せ宮を田舎し女の躰に扮装しり
 重秀も田舎道者躰に扮装し木曾の間者と俱し夜中小に登れ山門を叩き出

東坂本小下り北國へと落りし道中恙なく八月十四日小若宮木曾に御著し
 り木曾の悦びしり是より北陸宮と傳たり重く尊敬者なれむ加賀
 大納言の縁しり加賀能登越前の國人小内々木曾殿の旗下小属し若
 宮の御為小軍忠を励むし誓書を認め人質を差越者絶間たり木
 曾殿の勢ひ弥強大なりしり猶も時節を見合萬吏隠密に執りしり
 りれ々まむ六波羅小木曾殿の結構を安しりりり

大夫房寛明属義仲條

都小々清盛入道高倉宮一味の輩を尋ひ出し悉く珠を加へるも第四の宮
 の行儀おれされむ大に心を焦燥厳し諸方を尋捜させれども更に分明
 かりしり已むを得む其後小々置きしり此度宮小加騰せし三井寺に
 南都乃真福寺東大寺乃大衆を深く惡し如何もし此怨を報せんし其
 多其分中乃南都より三井寺へり及謀り女中小清盛者平氏糟糠武家塵

友と書し書を深く憤り其筆者を探りて原公藏人道廣とて武士とて
小納言信西が門人をとて天性智也遅く和漢の書籍に通じ博學剛記
乃者をれ信西が執達とて勸學院の紀文章稿を預りて後出家して南
都兵福寺に住じ法相華嚴を學び最上房信教と名給一山の文者を令と
申えり即ち儉非違使判官兼任とて武士の命と急死南都の池向の
悪僧信教を屬しとてきり我面前より渠が毫持と腕を引拔架ふり
登りと敦固わく下知とるふと兼任承り手乃者五十余人を列具し直小
南都へ池向の兵福寺の寺中より長吏を呼出さくや々々當寺中より
最上房信教と僧やある渠三井寺へ反牒を書し節大政入道とのを
悪さる小書とて糸上聞小達と急死召捕きしよの嚴命なり疾く搦
捕さ差出さしと推柄押命とるを長吏大に敬馬たや々々仰りて
信教と僧房中小是あり去りて渠元來究て我慢剛氣乃者や

寺中の者の命を頼むこと何卒直き小召捕りて既り玉とて小と兼任さ
むと長吏を空内者小と信教が房と向ひて是より先小長吏と
潛り信教が房へ人をまてせ只今都六波羅より汝を召捕小向ひ疾く電
せよと言はるしを定めて逃延く空房をたぬとあり信教が房近く
かふまふ兼任小向ひおれを御尋の最上房が住所より踏込か
玉と教其身我房へ逃りたり然れ彼信教が原武士とて武術小達し力
三十人小敵とて剛の者なれ今僧形とられ猶勇力携す六波羅の征
兵の向より長吏が許より告越落よと教られも天子を困り万民を服と
清盛が家人悪さる悪し中あて目小物見せ其後退くと日宿の法師六
人と俱小鎧一縮し得物を携し相待り斯とてと判官兼任何の用意も
なく士卒小房門推用せまへる正面小鎧とて法師武者七人得物を
携し弓響かへけてまへる大に敬馬たや々々信をせと大音も是と六波

羅どの命を請最上房小御尋の条あつて。判官兼任向ふふ。汝亦有無の
 儀をもち子狼藉せむ。助るべし命も助るべし。たど速小六波羅へ糸上
 科の有無を疎謝せよ。呼りぬむ。信救呵々と晒ひ我々と清盛を平氏に
 孫武家乃塵芥と書し信救よ。汝言を餌とて我を釣んとす。何ぞ信
 どの法王を押電天子の御位を下しなる。逆臣の録を食汝亦佛界の程
 かりしれよ。いすり早く各害りしけり。前を差取寧結散す。射ふ。是
 が為小判官が羊の者十五六人矢庭射しれ。残る堂も周障強だ。門外より
 と列兼任大の怒り。悪た瘦法師の腕まき。残る士平小下知をけ。二
 小込を信救と物ともせ。前種を。か弓箭投捨長刀柄長く取伸。群
 敵中小割へ前後左右小切伏。秘術を。働け。日宿の僧も我
 一と得物をち振追つ返。戦ひ。兼任も茲を大吏とまり廻。下知を
 傳(自身太力を抜排して日宿二人を切捨猶も嚴。採まされ。信救小刀の

法師六人も遂小口一枕小討ま。兼任が羊の者も三十人む。小討たれ
 丈夫。薄手重手肩。物の用。えぬ。兼任と信救と。俱り
 所乃手をも負され。互小向ひ。令せ。往一來。右小拂ひ。左小切を右
 緒。鋒より火花を散。戦ひ。終。兼任敵の長刀を緒損。綿髪より
 咽論。切。瘡。信救得。水も海。兼任が首と討落
 一々。此勢ひ。残る者も。公方。逃散。信救。其。鎧。脱。其
 真福寺を落。跡を暗。都。睿山。不知音。僧。永雲。者。在。其
 公方。身を寄。睿山。西塔。尋行。云。の。お。む。を。解。小。永雲。も。信。救。が。武。勇
 膽。を。賞。美。和。僧。を。南。山。小。留。ん。り。安。な。れ。も。六。波。羅。乃。使。を。討。る。者。を。舍
 載。置。ん。も。後。日。の。咎。め。量。が。し。但。我。法。友。小。頭。真。御。坊。北。國。の。木。曾。殿。小。由。縁。首
 心。彼。人。乃。消。息。を。乞。受。く。信。列。下。木。曾。殿。小。身。を。寄。お。を。万。全。の。活。計。あ。ん
 と。勸。る。小。下。信。救。大。小。悦。び。さ。さ。左。も。右。も。さ。さ。ひ。め。と。ん。ふ。永。雲。心。得。即。時



大夫坊寛明

信救と

名乗一才

平家乃

討入官

兼任を

射く南都

を落る囚



小頭真阿闍梨が行信救を結り書翰を繕ふ阿闍梨快く承りて
 木曾との頼乃帖を志す云々永雲小賜云永雲深く謝し信求阿闍
 梨の消息をあふふ信求厚く礼謝し行脚の僧の跡となり遂に磨山
 を立出信列おのむた木曾の消息を呈し木曾どの
 深く悦びぬ我久く和僧の博學多才なる成史一度相見せんを願ふ豈
 こゝろ躬尋のみきこられん向は我此木曾お停り平家追討の力をさすけ
 られんと他ゆなくもあされ多信救も大の悦び是より木曾殿の
 多か平家への安んず成輝り名を大夫房覚明と改め昼夜木曾どの傍り侍
 座し専ら平家追討の謀を志し合はる

諸國源氏蜂起之條

去程小太政入道清盛我を惡し信救を捕へ仇を報せんとかりし其
 乃信救却り判官兼任を討て遂電せりと史躍り上つて大の怒り是

皆奈良法師も當家を枉ん計ひ惡僧信救を落せり物
 今般三井寺の衆徒奈良の天衆ホ高倉宮の謀叛ふとかり當家を亡さんと
 せし言諸道断の曲り後來り刃凝し三井寺をも東大寺をも焼
 亡し怨を報せし心小巧も又かり高倉宮已小緒國の源氏も令旨
 を申し何時凶徒都を襲ひ法皇新院を屬し其心構り如何思
 撰列福原遷都し其患を避く不如此俄に皇上々皇一院其外百司百
 官小此議を觸り治承四年六月三日を都出の日と定め君を
 月卿雲客大い小共ら如何垣武天皇此京を草創しむり
 不易の都と定めいしを人臣の身と遷都も如何あつて議論
 匡々然も誰有く入道を脱伏する人か是罪なく其心構り如何思
 ひ之兼る六月三日と定めを一日引あげ六月二日都出と觸渡り供奉の
 上下周障騒だり取物も取あむと王上上皇一院の宝輦を守護し年月住あり

先祖せんぞ對たい不孝ふこう子こたり末代まつだいの青吏せいし小雛こひなをを残のこしを居ゐるを理りをを遠とてを練れんりを争あへをれを木曾殿きそとのんより緒勇士じゆうゆうしも其格そのくわく言いふを屈くつ伏ふくしを口くちをを餅もちをを居ゐるを

木曾義仲勳功圖前編卷之内畢

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 木曾, 義仲, 勳功, 圖, 前編, 卷之内畢]

